

2019年度 防災教育 チャレンジプラン 活動報告会

Disaster Management Education Challenge Plan Competition

2019年度
防災教育
チャレンジプラン
成果発表

2020年度
防災教育
チャレンジプラン
決定・発表

日時: 2020年2月15日(土) 10:00 ~ 17:00
会場: 東京大学 地震研究所1号館(東京都文京区)



www.bosai-study.net

主催: 防災教育チャレンジプラン実行委員会、内閣府(防災担当)、国立研究開発法人防災科学技術研究所

共催: 東京大学地震研究所、一般社団法人防災教育普及協会

後援: 消防庁、文部科学省、国土交通省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、日本赤十字社、全国都道府県教育委員会連合会、日本PTA全国協議会、防災未来賞ほうさい甲子園事務局



河川 公益財団法人河川財団による
基金 河川基金の助成を受けています。

会場図

■ 館内図



- ※ 喫煙所は、3階喫煙室のみになります。それ以外は屋外も含めて禁煙です。
- ※ 施設常設の機器等には、お手を触れないでください。
- ※ 入室禁止箇所、未使用の部屋には立ち入らないでください。
- ※ 報告会会場内での、飲食及び携帯電話の通話はご遠慮ください。

■ 会場図





会場利用案内

■ 会場座席

- ・「会場図」に従い、所定のエリアにご着席ください。

■ 施設利用にあたっての注意

- ・喫煙は、指定の場所以外は《禁煙》です。
- ・施設常設の機器等には、お手を触れないでください。
- ・入室禁止箇所、未使用の部屋には立ち入らないでください。
- ・昼食はもしくは近隣の店舗等をご利用ください。
- ・ゴミは、各自の責任ですべてお持ち帰りください。
- ・携帯電話は、電源をお切りになるかマナーモードに設定し、会場内での通話をご遠慮ください。
- ・大学内では、他にも講演・試験等が実施されていますので、教室周辺ではお静かにお願いいたします。

■ 発表・講演等の記録について

- ・活動報告会の記録のため、事務局側にて、音声の録音、ビデオ撮影、写真撮影を行います。また、これら資料をデータベース化し、防災教育チャレンジプランが関係する媒体（ホームページ、パンフレット、報告書等）へ掲載または関係者に提供しますので、ご了承ください。

■ ネームプレートについて

- ・受付でお受け取りになったネームプレートは、首からお提げください。
- ・昼食時等で外出される場合、入館時には必ずネームプレートをご提示ください。
- ・お帰りの際は、受付常設のネームプレート回収ボックスに、ご返却をお願いします。

《発表団体対象》

■ 展示物について

- ・展示物掲示～配置～撤去及び回収は、出演団体各位の責任で行ってください。
- ・施設の床、壁面、備品等を汚したり、傷をつけたりしないよう、ご注意ください。

■ 発表方法について

- ・事前にご提出のスライドデータに基づき、説明を行っていただきます。
- ・発表時間は事前にお知らせしたとおりです。時間の経過は、ベルでお知らせしますので、**時間厳守**をお願いします。
- ・各部の発表順が2番目以降の発表者は、ひとつ前の団体の説明が始まるのと同時に、各自で待機席まで移動していただき、ご着席ください。

防災教育チャレンジプランとは？

■ 防災教育チャレンジプランの目的

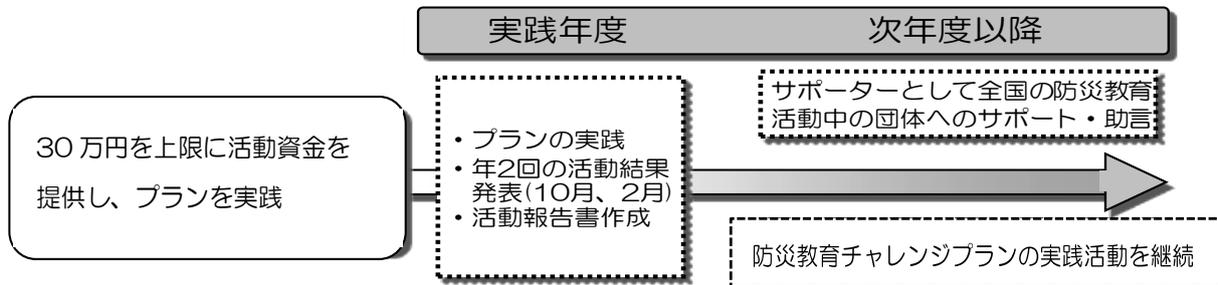
国内外で大規模な災害が起きている昨今、またいつ災害がやってくるかわかりません。いつやってくるかわからない災害に備え大切な命を守り、できるだけ被害を減らし、万が一被害があった時すぐに立ち直る力を一人一人が身につけるため、全国の地域や学校で防災教育を推進するためのプランです。

全国各地の防災教育への意欲をもつ団体・学校・個人等に対し、より充実した防災教育のプランを募集し、「防災教育チャレンジプラン」として選出した上で、その実践への支援を行います。

1年間の実践の後、その実践例や支援した取り組みの内容を活動報告会を通じて広く公開・共有するとともに優れた実践の表彰を行うことで、全国の防災教育に取り組む団体・学校・個人やそのプランに光をあて、各地域で自律的に防災教育に取り組むことのできる環境づくりを目指します。



■ 防災教育チャレンジプランの実践スケジュール





2019年度 実行委員の紹介

(委員長)

林 春男	国立研究開発法人防災科学技術研究所 理事長
市川 啓一	株式会社レスキューナウ危機管理研究所 代表取締役
井上 浩一	防災ネットワークプラン 代表
鍵屋 一	跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 教授
金田 義行	香川大学四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構 副機構長・地域強靱化研究センター長・学長特別補佐・特任教授
木村 玲欧	兵庫県立大学環境人間学部・大学院環境人間学研究科 教授
国崎 信江	株式会社危機管理教育研究所 代表
栗田 暢之	認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 代表理事
齊藤 清一	特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク 事務局長
酒井 慎一	東京大学地震研究所観測開発基盤センター 准教授
佐藤 公治	南三陸町立歌津中学校 主幹教諭
佐藤 健	東北大学災害科学国際研究所情報管理・社会連携部門災害復興実践学分野 教授
澤野 次郎	災害救援ボランティア推進委員会 委員長
篠田 貴司	足立区立第九中学校 主任教諭
諏訪 清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
瀧川 猛	千葉県立市原特別支援学校 教頭
中川 和之	株式会社時事通信社 解説委員
中村 一樹	国立研究開発法人防災科学技術研究所気象災害軽減イノベーションセンターセンター長補佐・研究推進室長
平田 直	東京大学地震研究所地震予知研究センター センター長・教授
福和 伸夫	名古屋大学減災連携研究センター センター長・教授
舩木 伸江	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科 准教授
舟生 岳夫	セコム株式会社 IS 研究所リスクマネジメント G 主務研究員
松尾 知純	防災ゲート・パートナーズ 代表
三浦 伸也	国立研究開発法人防災科学技術研究所防災情報研究部門 主幹研究員
南島 正重	東京都立両国高等学校附属中学校 主幹教諭
粟井 明彦	文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 安全教育推進室長
五島 政一	国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部 総括研究官
齋藤憲一郎	文部科学省研究開発局地震・防災研究課 防災科学技術推進室長
田中 昇治	総務省消防庁国民保護・防災部防災課 地域防災室長
中尾 晃史	内閣府政策統括官(防災担当)付 参事官(普及啓発・連携担当)
波多野真樹	国土交通省水管理・国土保全局防災課 防災企画官
林 正道	内閣府政策統括官(防災担当)付 参事官(調査・企画担当)

(2019年7月29日現在、所属役職別50音順、敬称略)

プログラム

9:00～	受付(3階エレベーター前)	
10:00	開会	
10:00	開会挨拶	
	防災教育チャレンジプラン実行委員長 内閣府大臣官房審議官(防災担当)	林 春男 村手 聡
10:10	2019年度 実践団体発表①	司会：防災教育チャレンジプラン実行委員 三浦 伸也
10:10～	① 京都市立正親小学校	※発表 1 団体 10 分
10:20～	② 北海道標津高等学校	
10:30～	③ 名古屋市立工芸高等学校 都市システム科 “ひと”と“まち”づくり協創ワーキンググループ	
10:40～	④ NPO 法人小網代野外活動調整会議	
10:50～	⑤ 京都府立鴨沂高等学校	
11:00	休憩 《20分》	
11:20	2019年度 実践団体発表②	司会：防災教育チャレンジプラン実行委員 舟生 岳夫
11:20～	⑥ ミラクルワッシュ	※発表 1 団体 10 分
11:30～	⑦ 被災地を写真でつなぐ実行委員会	
11:40～	⑧ 新居浜市立金栄小学校	
11:50～	⑨ 立正大学地球環境科学部 教育工学・学習科学研究室	
12:00～	⑩ 新潟市立白南中学校	
12:10	昼休憩 《60分》	
13:10	2019年度 実践団体発表③	司会：防災教育チャレンジプラン実行委員 松木 伸江
13:10～	⑪ 岡崎市立常盤東小学校	※発表 1 団体 10 分
13:20～	⑫ 高知県立大方高等学校	
13:30～	⑬ 目黒星美学園中学高等学校	
13:40～	⑭ 愛媛県立宇和島東高等学校	
13:50～	⑮ UR都市機構(尾山台団地自治会)	
14:00	休憩 《20分》	
14:20	サポーター認定証授与・記念撮影	
	防災教育チャレンジプラン実行委員	金田 義行
14:40	2020年度 実践団体ポスターセッション	司会：防災教育チャレンジプラン実行委員 中村 一樹
14:40～	2020 年度実践団体ポスターセッション説明	※発表 1 団体 1 分
14:45～	2020 年度実践自己紹介	
	① 京都府立東稜高等学校キャリアコースライフマネジメントクラス	
	② 岐阜県立大垣特別支援学校	
	③ 北海道標津高等学校	
	④ 愛知県立豊橋特別支援学校	
	⑤ 常総市防災士連絡協議会	
	⑥ 特定非営利活動法人 i-care kids京都	
	⑦ 愛知県刈谷市井ヶ谷町内会体育部	
	⑧ ガールスカウト東京都第 172 団	
	⑨ 佐野日本大学短期大学防災チーム	
	⑩ 愛媛県立宇和島東高等学校	
	⑪ 新居浜市立金栄小学校	
	⑫ 呉工業高等専門学校	
	⑬ 名古屋市立工芸高等学校 都市システム科 “ひと”と“まち”づくり協創ワーキンググループ	
	※終了後2階展示会場に移動	
15:10～	2020 年度実践団体ポスターセッション(コアタイム)	
	※団体を2グループに分けて、前半(団体番号・奇数)と後半(団体番号・偶数)で各 30 分発表を行う	
16:10	休憩(3階本会場に移動) 《15分》	
16:25	2019年度 防災教育チャレンジプランの表彰・記念撮影・講評	
	防災教育チャレンジプラン審査委員長	渡邊 正樹
16:45	閉会挨拶	
	防災教育チャレンジプラン実行委員長	林 春男
16:50	閉会	
16:50～17:00	2020 年度実践団体 説明会 (各団体より 1 名参加)	
17:30～19:00	情報交換会 (ルヴェソソヴェール本郷)	

※14:40 より、別会場にて 2019 年度防災教育チャレンジプラン審査委員会を開催



2019 年度実践団体の紹介

① 京都市立正親小学校 / 京都府京都市

京都市立正親小学校は京都市の上京区西陣に位置しており、明治5年の学制が始まる3年前に、地域の人々が「子どもたちのために」とお金を出し合い建設した、いわゆる番組小学校である。来年創立150周年を迎える歴史と伝統のある学校で、校舎は築80年以上であり、外壁はタイル張り、内装にも大理石が施されているように当時としては豪華な作りである。現在児童数は168名、全ての学年が単級の小さな学校である。少人数を生かした縦割り活動が盛んで、学年を超えて仲良しである。またその立地や、学校を愛する地域愛のある地元の方々を財産とし、地域をテーマに総合的な学習を展開し、地域を愛する子の育成を目指している。

② 北海道標津高等学校 / 北海道標津町

本校は、北海道標津町内にある全校生徒数170名の小規模校で、洪水、高潮、雪害、津波被害の想定される地域に位置しています。本校生徒会では、HUGを取り入れた防災の取組を実施、さらに町主催の防災訓練に協力をしてきました。近年は、本校の避難所としての機能を確認するために教職員と生徒によるHUGを実施、また、PTA研修会でもHUGを取り入れ、防災意識の向上に努めてきました。生徒会交流も実施しており、釧路管内の高等学校や隣接する羅臼高校との交流会を重ね、活発な生徒会活動を実践しています。

③ 名古屋市立工芸高等学校 都市システム科 “ひと”と“まち”づくり協創ワーキンググループ / 愛知県名古屋市

本校都市システム科は、平成30年に創設75年を迎えた歴史ある土木系学科です。近年の技術の革新や社会情勢の変化を受け、「防災教育」、「まちの魅力を活かしたまちづくり」、「ICT技術」、さらには「インフラマネジメント」に関する教育の充実に努めてきています。今回の応募を契機として、これまでの「防災」から、「災害に備えたまちづくり」に発展的に転換し、生徒が授業で学んだ知識及び技術を糧として、地域社会とともに、この在り様を探究することを通して、住民主導の「安心なまちづくり」の実現を寄与することを目指します。

④ NPO 法人小網代野外活動調整会議 / 石川県金沢市

当法人は三浦市にある小網代の森で生物多様性保全の管理作業を流域思考で実践しています。小網代の森の地形を活かして、流域思考での環境教育や防災教育も実施しています。今年度からは三浦市社会福祉協議会と連携し、健康や福祉に関わることに、防災についても地域の方々と一緒に考え学ぶ活動を始めました。「流域」で防災を考えることは、地域の方々にとどのように役立つのか、実際にはどのような防災の取り組みができるのかを考えながら活動しています。

環境問題と防災が密接な関係にあることを理解していただけるような防災イベントを実施しています。

⑤ 京都府立鴨沂高等学校 / 京都府京都市

鴨沂とは、鴨川のほとりという意味で、校舎建て替えの際、発掘調査で、天明の大火の黒く焦げた地層や、かつて鴨川の川底であったことを当時の生徒も調査に参加し体験しました。大火や地震、洪水の文献も京都は千年の都であっただけに数多くあり、その教訓を活かさねばなりません。学校の西隣は仙洞御所があり、その周囲には京都御苑が広がり、災害時には大きな役割を果たさねばなりません。そのためには、施設としてだけでなく、これまで地域と密に連携した関係と生徒自らの能力を防災に備えて発揮してゆきたいと考えます。

⑥ ミラクルウィッシュ／兵庫県三田市

2014年1月、兵庫県三田市にて乳幼児を育てるママが集い「子育てしやすい街『三田』をもっと楽しみたい」「三田での子育てに小さなミラクルを起こしたい」と活動を開始。こんな事をしてみたい、あったらいいな」と思うことを仲間で共に考え具現化することで、「地域で支えあえる人との出会いや支えあいの仕組みづくり」の場を作り、「さんだ女子防災部」の他、ママのやりたいことを応援する「ミラクルママ講師」、子どもたちがお金の仕組みと大切さを体感できるイベント「子ども店長」等を企画開催し、地域貢献に努めている。

⑦ 被災地を写真でつなぐ実行委員会 /福岡県北九州市

九州北部豪雨発災後、北九州市立大学では、大学生災害ボランティア支援センター（通称：うきはベース）の運営や災害復旧支援に携わらせていただいている。その後、うきはベースの活動の中で見えてきた「九州北部豪雨の風化・災害ボランティア参加者の減少」この2つの課題を解消するために、写真展の活動を開始した。平成30年6月には「被災地を写真でつなぐ実行委員会」を設立し、子どもたちへの防災教育など、被災地での学びを市民にフィードバックする活動も行っている。これまで写真展を8か所で開催。朝倉日帰りツアーを1回開催した他、講演活動も行っている。

⑧ 新居浜市立金栄小学校 /愛媛県新居浜市

新居浜市では、平成16年豪雨災害で甚大な人的、物的被害を受けました。西日本豪雨災害では、かろうじて大きな被害はなかったものの、愛媛県内でも特別警報が発令されるなど、被災する可能性は紙一重でありました。このことから、被災した経験を経て、金栄小学校5年生が1年間を通じて、防災学習の取組を実施し、自治会、地域見守り隊などの関係機関とまちあるきを行い、e防災マップなどの作成などにも取り組んでおります。あらゆる自然災害などから被害を出さないためにも、地域の防災力の向上を図ることを目的として防災活動を行っています。

⑨ 立正大学地球環境科学部 教育工学・学習科学研究室 /埼玉県熊谷市

立正大学地球環境科学部教育工学・学習科学研究室では、アクティブ・ラーニングを中心に、学習者中心の教育・学習方法や学習環境について研究しています。同時に、地域連携活動にも注力し、見てみようよ！常総市の会にも参加しています。

防災教育においては、教育を実施する側にも、実施をされる側にも、双方で学び合い、より良い形を探究していこうとするやり方にはどのようなものがあるのかを考えています。

⑩ 新潟市立白南中学校 /新潟県新潟市

当校は、2003年に中学校統廃合により、新しく創設された学校である。生徒は、三地域から通学している。三地域はそれぞれ歴史が古く、商業、果樹栽培、農業と中心をなす生活基盤が違い、生活様式、考え方、気質等に少しずつ違いがある。当校は、この三地域を融合した新しい地域づくりを推進するミッションがある。

校区は輪中地域にあり、65歳以上の高齢者が多い。住民の多くは川を渡って通勤・通学をしており、平日の災害発生時等は中学生の力が求められ、地域の期待は大きい。

中学生も「地域に貢献したい」という強い思いをもち、防災の具体的な知識や技能を身につけたいと考えている。

⑪ 岡崎市立常磐東小学校 /愛知県岡崎市

常磐東小学校は118年を迎える伝統校ですが、全校42名の小規模校です。児童は、人との関わりが少なく、素直な反面、積極性に欠ける面があります。学区は、昔は石の町として栄えていましたが、今は、若い人が離れ、過疎化・高齢化が急速に進んでいます。県より土砂災害特別警戒区域に85か所指定され、危険な所が多くありますが、避難が容易にできない方もいます。地域の方は、学校を核とした防災活動に期待しています。



⑫ 高知県立大方高等学校／高知県黒潮町

高知県立大方高等学校が位置する黒潮町は、南海トラフ地震で最大34メートルの津波高が予想されており、近年防災・減災活動により一層の力を注いでいます。

本校は規模の小さな学校ですが、その分地域の方々と一緒に活動する機会も多くあります。学校の周辺には、保育所、小学校、中学校があり、巨大地震に遭遇した際に高校生が果たす役割は大変重要なものになると考えています。在校中はもちろん、卒業後もそれぞれの場所で防災リーダーとして活躍できるような生徒を育てたいという思いで、より発展的な防災教育を推進していきたいと思っています。

⑬ 目黒星美学園中学高等学校／東京都世田谷区

本校では「被災地ボランティア研修」を実施する中で、防災意識が高まり「私たちは未来の被災者」を合言葉に、校外で活動しています。特に、「生徒に防災を教える」という意識を転換し、「防災のヒントを与えて、女子中高生ならではのアイデアを引き出す」防災教育を展開しています。災害時に深刻なトイレ問題への取り組みも特徴的です。また、災害時に「福祉避難所（母子）」となる協定を結んでいます。昨年度、防災教育チャレンジプラン実践団体として、多くの学びと活動の広がりがありました。今年度も皆でわくわく活動に取り組んでいきたいです。

⑭ 愛媛県立宇和島東高等学校／愛媛県宇和島市

愛媛県立宇和島東高等学校は、愛媛県南予地方に立地し、創立123年目を迎えた伝統校です。全日制普通科・理数科・商業科、定時性が設置され、アクティブラーニングや課題研究などによる、問題解決型の学習が多く取り入れられています。スーパーサイエンスハイスクール SSH 事業の活動も盛んです。また、質の高い文武両道をモットーに部活動に励み、文化部・運動部とも多くの部が全国大会で活躍しています。

委員会活動や SSH 課題研究などで防災について学んできました。自分たちの学びの場を、近隣の小中学生に広げ、地域の防災力向上につなげたいと思います。

⑮ UR都市機構（尾山台団地自治会）／埼玉県上尾市

UR は戦後の住宅不足を解消するため昭和 30 年に設立された日本住宅公団を母体とし、高度成長期の住宅団地の整備、ニュータウン開発、都市域での再開発・まちづくりなど、国の政策を具現化する組織としての役割を担ってきました。平成 16 年より独立行政法人として、都市の再生や賃貸住宅のマネジメント、東日本大震災や熊本地震等の災害からの復興も進めています。

大規模災害の発生が想定される中、UR では 60 年にわたる事業経験や阪神大震災以降の復旧・復興ノウハウを活用し、被災した自治体の支援や災害に強いまちづくりを進めて参ります。

MEMO

① 京都市立正親小学校

プラン名 守れ正親 こども防災隊

プランの対象 小学生 高学年

所在地 京都府京都市

ープランの目的・ここがポイント！

- 古くからの街並み、家がひしめいた細い路地。行き止まりや迷路のような路地密集市街地。大きな地震や火事があるとひとたまりもない。
- 5年生が防災について学び、低学年や、地域の方に伝えることで、防災意識を高める。
- 小学校が地域の防災活動の中心的な存在になる。

ープランの概要

- 5年生の学び** AED・消火器体験・町歩き・お年寄り体験・クロスロード・防災ゲーム・もしも大地震が起こったら…防災かまどの修復など様々な体験を通して、自分たちができること、しなければいけないことを考え、防災フェスタや防災炊き出しなどのイベントを行うことで全校や地域に伝える。
- ミッションX** 全校・保護者・地域へ広げる場として、休日に防災路地めぐりをゲーム化して行う。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

- 5年生にとって**……教師主導ではなく、切実感をもって学んだことを自分たちがイベントを開催することで伝えることができ、大きな社会参画できたという自己肯定感を味わう。
- ミッションX**……ゲームを通して5年が学んだことを全校で楽しんで学んでいくとともに、そのイベントに保護者や地域・そして消防署などを巻き込んで協力をしていただくことで、地域に広がっていく。

ー成果として得たこと

5年生の変化

- 子供たちの目の色が変わっていった。自分たちが体験したことから（地震の恐ろしさ・実際に起こった時を想定して考えることの大切さ、周りにおられるお年寄りにも目を向けなければいけないこと、自分より小さな子供たちを守るためには、まず自分が助からなければならないこと）など、様々な考えを持ち、主体的に学んだ。
- 学んだことを発信するために、防災フェスタや防災かまどでの炊き出しなど、実際に近いことを考え出し、社会参画ができ、自己有用感を味わうことができた。
- 防災チャレンジプランとして、今年度新しく多くの人との関わりができた。（同じチャレンジプランの鴨沂高校・ボーイスカウト・地域の社会福祉協議会・地域の町内会の人々）
- ミッションX**……学校中の子供たちだけでなく、幼児やその保護者たちも参加し、路地の銘板を見て、その路地が袋小路であるか見分けられることを知る、防災扉を実際に通る、AEDの使い方を知る、地域のお年寄りのお宅を訪ねて安否確認をする、まさかの時の役立ちグッズを知るなどの多くの体験を楽しみながらすることができた。またその取り組みを地域の方にも知ってもらうことができた。

ー全体の反省・感想・課題

- 多くの方とかわかり、活動の場が広がり、考えが深まった。
- ミッションXは、全校に広げるだけでなく、地域や保護者・幼児・市役所・消防署も巻き込むことができ、とても有効だった。
- 今後、単元の初めに入るときに、実際の阪神淡路震災の被災者にお話を聞くなどの体験を入れるとより切実感が出ると思う。来年の活動までに探したい。

ー今後の継続予定

- ・今年度の3. 11のシェイクアウト訓練も5年生が主催し、全校や地域の保育園と合同で行う。
- ・今年の単元を振り返り、来年も同様の単元に取り組んでいきたい。





②北海道標津高等学校

プラン名 標津高校防災啓発プロジェクト

プランの対象 生徒・地域住民

所在地 北海道標津町

ープランの目的・ここがポイント！

高校生が主体となった防災減災活動に取り組み、様々な活動を通して高校生防災リーダーを育成し、地域防災を考え、実践できる人材の育成を行うプランである。その中で避難所としての高校の機能を町役場へプレゼンを行い、役場と協力して学校祭での防災展示を実施。また、オリジナルHUG作りを行う中で地域の状況を理解し、地域にあわせた自然災害を設定したHUGを作り上げる。防災講話やボランティアや研修報告を行うことで高校生から地域住民へ防災意識を高めるプランである。

ープランの概要

- ・町役場へのプレゼンテーションで避難所機能を紹介し、備蓄等を要請。
- ・地域住民に開かれた学校祭で防災展示を町役場との共同開催。
- ・被災地の支援と避難所設営に向けた学習のため、被災地ボランティア（福島）、防災研修（奥尻島）を行う。
- ・地域の自然災害を考え、地域住民にあわせたオリジナルHUGを作成し、地域住民と実践する。
- ・生徒たちで避難所を運営できるかシミュレーションするために部活動生徒に協力を依頼しREAL HUGを行う。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

生徒の表現力や自己有用感を高めるだけでなく、責任を持って活動に取り組む姿勢を通して、地域防災リーダーとしての意識を高め、地域に貢献する心の成長が期待できる。

ー成果として得たこと

- ・避難所機能をプレゼンすることで役場職員へ学校機能を周知する機会となり、また高校生の防災力を認識する機会となった。さらに、町役場との連携を深めることができた。
- ・ボランティア活動や防災研修を通して自他共に命を大切にすることを育み、地域へ還元しようとする生徒の変化が見られた。これらの活動を通して、HUGを行うときも参加者をリードし、地域の他の高校生へ防災の輪を広げることができた。
- ・オリジナルHUG作りを町役場と協力して行うことで地域の災害について学び、それを伝える大切さを身をもって感じ取る事ができた。

ー全体の反省・感想・課題

多くの生徒に災害への備えを意識付けできたかという事に關しては未だ不十分であり、全校生徒への防災教育の普及には、カリキュラムに踏み込んだ取り組みを実施しなければならない。また、防災研修を行ったが、ボランティア活動を含め、生徒に実体験させる活動の充実が今後の課題でもある。さらに、地域住民への防災活動の広がりについて、町役場とのさらなる協力体制を構築していく必要がある。

ー今後の継続予定

オリジナルHUGカードを用いた地域住民とのHUGの実施や防災講話の継続。避難所運営に関する生徒防災組織の充実と避難所設営訓練の実施。近隣小中学校への防災教室の実施。学校祭における防災展示の充実。防災研修の実施。



③名古屋市立工芸高等学校 都市システム科 “ひと” と “まち” づくり
協創ワーキンググループ

プラン名

“希望のひかり” ～届けたい。私たちの力で。安心できる「ひかり」を～

プランの対象

生徒、教職員、住民
自治会、行政ほか

所在地

愛知県名古屋市

ープランの目的・ここがポイント！

当科がこの取り組みを行おうと考えたのは、2018年9月の「北海道胆振東部地震」及び「台風24号」による広範な地域での停電の発生に、その端を発します。

当科では、前掲の2災害における被災状況から、「地域住民が停電時において安全に避難するためには、どのようにしたら良いのか。」及び「それらを遅滞なく可能とするために、まちづくりのツールとして、何か備えることはできないのか。」という目標を得て、具体的な取り組みを実施しました。

ープランの概要

ここでは、生徒、教職員、地域住民、行政など様々な立場の方と次に示す取り組みを実施しました・

- (1) 停電災害に関するグループディスカッションと台風15号による被害状況調査の実施。
- (2) 夜間におけるモノの見え方に関する実験装置の製作とそれを目的とした予備実験の実施。
- (3) 地域住民の方等を対象にした「停電時避難の危険性」に対する啓発活動、ブラックアウトに関する実験の実施とその結果分析の実施。
- (4) 停電時でも安全に避難することができるようなまちづくりの検討と、それを具現化する取り組みの実施。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

本取り組みを通して、停電時避難の危険性を体感することにより、それを認知することが可能となるだけでなく、生徒の中に、地域と関わる力やものづくりのための創造力を引き立てることが可能となる。

ー成果として得たこと

本プランにおけるパネル展示や停電実験を通して、停電時における避難の危険性について、幅広く地域住民や企業に対して啓発することができました。また、生徒はそれら活動への参加やそこでの成果をまちづくりに展開する方法を検討する過程を通して、日ごろの学びを深化させただけでなく、まちづくりと住民の関係性に対する理解を深めることができました。

加えて、イベント等における他者との関わり合いやプロジェクトを進める上での打ち合わせ等を通して、研究を行うことの意義を理解し、生徒自身の自己肯定感を大きく高めることができたことも成果として挙げるができます。

ー全体の反省・感想・課題

本取り組みのような、ブラックアウトに関する啓発活動、実験活動がなく、全ての面において、文字通り「ゼロからのスタート」となりました。

とくに、実験方法や試作品の作製に係る材料の選定の面では、学校所蔵の書籍やインターネット検索だけでは必要な情報が得られず、関係機関等に資料や知識の協力を頂くことに時間を要し、実用化に向けた取り組みが道半ばとなったことは悔やまれる点として挙げられます。

ー今後の継続予定

当科では、今回の成果を基に、更なる製品の改良や追加実験を行うとともに、自治体等と連携し、その成果を広く社会に還元できるような取り組みを充実させたいと考えています、また、次年度以降、様々な場面でのその成果を報告してゆきたいとも考えています。





④NPO 法人小網代野外活動調整会議

プラン名

小網代の森で「流域思考」による温暖化豪雨時代の防災を考える

プランの対象

全年齢

所在地

神奈川県三浦市

ープランの目的・ここがポイント！

「流域思考」で防災を考える

温暖化豪雨による災害が増えている今こそ、自分の暮らす場所がどの川の流域で、自分の家の周りにはどんな地形なのかを理解し、大雨の時自分の家の周りではどのように水が流れるのかを理解しておくことが大切であることを、小網代の森やインフォメーションスペースを利用したワークショップ・ウォーキング・講演会を通して地域の方に理解していただく。

ープランの概要

「防災ポーチを作ろう」のワークショップ実施

「防災ポーチを作ろう」2日間のイベント実施

「三浦市における水土砂災害を流域で考える」実施

「小網代の森」防災ウォーキング(台風被害のため中止)

ー期待される効果・ここがおすすめ！

水土砂災害は、流域で起こるということを理解し、防災も流域で考えることの意味を知る。自分と自分の家族の命を守るために必要な備えや情報が何かを理解し、防災意識を高める。

ー成果として得たこと

毎年のように起こる大雨による被害、特に今年度三浦市は二度の台風と大雨により、大きな被害を受けたこともあり、ワークショップや講演会に多くの方が関心を持って参加してくれた。子どもたちもワークショップで作った防災ポーチを家でいくつも作り、おじいちゃんおばあちゃんに送ったり、学校で先生に伝えたりという報告があった。また、地元町内会の会長さんから、町内会のイベントとして防災ウォーキングを実施したいとの申し出や、社協との連携で防災ウォークを実施する計画が出来ている。幼稚園や小学校でのワークショップ実施依頼もあり、市民のみなさんの防災意識の向上や、防災についてしっかり学びたいという意欲を感じることが出来た。

ー全体の反省・感想・課題

9月の台風により秋に実施予定だった、小網代の森の防災ウォーキングが実施不可となり残念だった。講演会の内容が少し難しかったため、子どもたちに向けての別のプログラムが必要と感じた。イベント・ワークショップや講演会の広報について行き届かなかったところがあり、終わってから参加したかったという声が多く聞かれた。市内全域に漏らすことなく広報することは大きな課題になっている。

ー今後の継続予定

すでに来年度のワークショップ依頼が数件あり、社協とのウォーキングも計画されている。講演会の実施も含めさらに市民のみなさんに流域思考で考える防災が浸透するよう、継続して活動していきたい。



⑤京都市立鴨沂高等学校

プラン名

新しい校舎を活かす防災教育

プランの対象

高校生

所在地

京都市京都市

ープランの目的・ここがポイント！

「防災教育を通して生徒の力を引き出し育むこと」が、本プランの目的である。危険箇所の発見やリスクの管理を行う際も、生徒自身の視点を最優先し、それらが集合することで生まれる新たな観点やその場での対話を重視する。こうして防災意識を養った生徒と、周辺地域住民や近隣小中学生とが共に防災について考える機会を経験することで、本校を含む地域全体の防災意識向上を図る。本校生徒は、そのような異質な集団と関わる経験を積むこともできる。

ープランの概要

- ・校内・通学路・自宅周辺における危険箇所の発見と対策の提案
- ・クロスロード実践
- ・オリジナルクロスロード作製
- ・オリジナルクロスロードを用いた地域住民や近隣小中学生との交流会実施
- ・「防災」を入口とした思考的な探究活動

ー期待される効果・ここがおすすめ！

まず、生徒が防災の必要性や重要性を実感し、自分事として捉えるようになる。そのため、議論の活性化や講義の理解度が向上し、質の高い防災教育が行われる。さらに、様々な表現方法を通して他者と交流することで、次代を担う上で必須となる対話的な協働によって課題に取り組む姿勢の身体化が行われ、本活動外でも持続的に課題を発見し、その解決に臨む姿勢が育まれると期待できる。

ー成果として得たこと

【生徒】防災知識・情報のみならず、リアルタイムに起こった災害情報についても自分事として捉えるようになった。また、遠方の災害でも、「もし自分に起これば」という想定をする機会が増えた。

対話的な協働によって課題解決に向かう姿勢や、主体的に物事に取り組む姿勢が身についた。

【教員】防災情報に対してより関心が増し、教材として用いる機会が増えた。そして、避難訓練において避難はしごを使用する議論が始まり実現した。また、教員間における防災意識の差異が明確になり、「防災」が組織の成長に必要な要因の1つになることを実感した。

【学外連携】交流会を機に、本プラン実践校である京都市立正親小学校から、クロスロードを用いた防災教育の小高連携依頼をいただき、本校生徒が1時間を全てファシリテートし、白熱した議論を行い互いに感心を深め合った。また、自衛隊と連携したキャリア学習の機会も生まれた。

ー全体の反省・感想・課題

学校全体で取り組むことができなかった点が何よりの反省点であるが、約半数の教員が少なくとも1回は本プランに関わった点や、「防災」という共通言語を生徒同士・教員同士が用いる雰囲気は創出した。カリキュラムマネジメントの一翼を防災教育が担う事が次の課題である。

ー今後の継続予定

危険箇所及びリスクの発見と対策の提案を継続し、今後は学校や自治体などの管理者へ積極的に発信する。そして対話を通して対策を実現し、より良いまちづくりの一助となる。また、企業やNPO、自治体などのステークホルダーと繋がり、生徒の力を社会総がかりで育み、広く活動成果を発信していきたい。



小高連携の様子



⑥ミラクルウィッシュ

プラン名

さんだ女子防災部

プランの対象

保育園・幼稚園の部、
大学一般の部

所在地

兵庫県三田市

ープランの目的・ここがポイント！

「乳幼児を持つママたちの、ママたちによる、ママたちのための防災組織」といえば「さんだ女子防災部」となるべく、学校における防災訓練や勉強会の機会の少ない未就園児・未就学児を持つ母親に特化した防災コミュニティの構築と存続を目指します。日頃から孤立することなく地域社会で安心して子育てができ、いざという時に命を守れる行動ができる組織・地域社会づくりに取り組みます。

ープランの概要

- ① 2017年「さんだ防災部」の設立により、乳幼児を抱えた親世代が災害時に自身と我が子の命を守る行動をとることができるようになるとともに、横のつながりを大切にした防災意識の高いママたちによるコミュニティの形成及びネットワークを構築する。
- ② 防災意識の育成、具体的な知識や備え、救援行動を学ぶことにより「命の守れるママ」を増やす。
- ③ 防災活動者とのつながりを持ち、切れ目のない防災意識の啓発活動と、支えあえる地域の輪づくりを続ける。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ① 防災講演会、グッズ紹介・作成等を通じて、実際にどう備えるか、どう行動するか具体的な知識と備えが身につく。
- ② 受信方の講演や研修の実施のみならず、参加者一人ひとりが防災意識を構築する中で、必要な情報の提供や、参加者に主体的に問題点や課題を捉え、解決策を組織の一員として見出せるコミュニティ力を養うことができる。

ー成果として得たこと

- ・毎月乳幼児・子育て世代向けの防災講座の開催。11講座開催。1～3月まで3講座予定。
- ・地域のイベントでの防災ブース出展による防災啓発。
11イベントに防災ブース出展。1～3月まで4イベント防災啓発予定。
- ・乳幼児子育て世代と小学生子育て世代への講演会。来場者数1200名。
- ・行政との連携・三田市防災会議委員となる
- ・新たな防災コミュニティづくり「あべの親子防災部」活動スタート（19年10月～）
- ・他の防災部コミュニティとの連携
オンラインでの防災講座。参加者は関西を問わず、関東や中部、四国からも参加
- ・関西にある防災部が集まり防災交流会を企画。団体としての強みや悩みなどを共有する場をつくる

ー全体の反省・感想・課題

プランの計画とは大きく変わってしまったが、乳幼児が集まるいろいろな場所でお話しをすることができ、ママたちの不安や、知りたいを一緒に考える場をたくさん作ることができた。一緒に活動したいといってくれるママたちや新たに防災部も立ち上げることができたことも、このプランにチャレンジしたからできたことだと感じている。



ー今後の継続予定

今後の課題としては、ママ防災団体と連携していく事、乳幼児親世代に特化した防災情報発信サイトの運営をしていくことを目標に今後も必要な地域での防災啓発や、地域と連携して防災コミュニティづくりとそのコミュニティの継続した活動に力を入れていく。

⑦被災地を写真でつなく実行委員会

プラン名

九州北部豪雨の発災から復興～今だからできる学びのかたち～

プランの対象

全国・学生

所在地

福岡県北九州市

ープランの目的・ここがポイント！

【写真展全国キャラバン活動】は、昨年度イベント会場や施設が中心であった写真展を、2019年度は「防災教育」に焦点をあて、小学校や大学、社会福祉活動団体などにおいて行った。被災地に行くことがなかなか難しい方への展示をすることで、災害ボランティアのイメージを変えるきっかけづくりに寄与した。【防災研修プログラム】は、「自分事にする防災イベント」「楽しく、被災時を考える・学ぶ」を目的に、3日間の帯企画として研修ツアーや避難ゲームをもとに、わが家の防災計画書を実践した。

ープランの概要

① 写真展全国キャラバン活動

写真展を5カ所、講演会時の展示を3カ所で実施。また、長野市における活動の写真展も行った。

② 防災研修プログラム

九州北部豪雨の被災地・朝倉市への研修ツアー、避難所体験宿泊、ぼうさい新聞の作成、リアル避難ゲーム、我が家の防災計画書作成・実施・振り返り 他、追悼イベント・講演・授業

ー期待される効果・ここがおすすめ！

被災地の現状を発信することで九州北部豪雨の風化を防止する。「うきはベース」という全国の大学生が利用した被災地の支援拠点の事例から、今後の被災地支援における大学生の可能性を伝える。

被災地の現状やこれまでの過程を理解した上で、私たちにできることを共有する。学校等での避難訓練では対応できない、発災時の混乱や情報の錯綜の中で正しい選択や対応ができるようになる。

ー成果として得たこと

写真展全国キャラバン活動では、小学校や大学などで実施することから、小中学生用・大人用など、写真や写真の脚注を会場・年代に合わせた展示方法に変更した。これにより、それぞれに合った学びを提供することができ、子どもたちの着眼点や疑問点、発想を引き出すことができた。

また、防災研修プログラムでは、北九州市の小中学生とその保護者が参加し、朝倉市の当時の様子や現状について理解するとともに、農園においてボランティアを行うことで、地域交流を図ることができた。また、避難所体験宿泊やリアル避難ゲームを通して楽しみの中から災害時につなげることができた。

さらに、自分の家ではこういった対策ができるか等について考え、実践する「わが家の防災計画書」を作成することにより、自分事として災害を捉えるきっかけを創ることができたと考える。

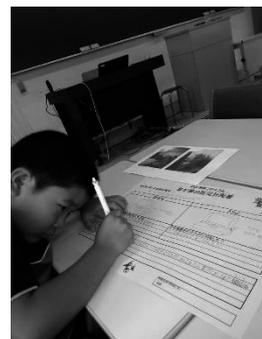
ー全体の反省・感想・課題

今回の主となる2つのプランでは、多くの方を対象に活動することができたと考える。一方で、災害弱者と呼ばれる「障害者」との関わりに課題を感じた。

また、小中学生などに向けた発信をすることはできたものの、一番身近である大学生の防災意識を高めることをもっと行う必要があると考えている。

ー今後の継続予定

現在は、2019年10月に発災した台風19号の被災地・長野県での活動を行っている。信州高大生復興支援チームとしての協働や大学生災害ボランティア宿泊拠点施設の運営等を担い、災害支援や防災に学生が関わる機会を持てるきっかけを創る活動を行う。また、長野市や朝倉市での復興支援を継続し、県外に向けた発信や防災・減災の観点での写真展全国キャラバン活動・デジタル写真展、小学校からの「脅しにならない」防災教育の実践を継続して行い、平時における学生のネットワークの構築を目指す。



我が家の防災計画書を作成する参加児童（小3）



⑧新居浜市立金栄小学校

プラン名

土砂災害・浸水被害から命を守れ。～過去の災害から学ぶ～

プランの対象

小学校高学年の部

所在地

愛媛県新居浜市

ープランの目的・ここがポイント！

- 1 平成16年に新居浜市金栄校区で発生した台風災害による被災体験を次世代に継承させ、平成16年豪雨災害を風化させない。
- 2 西日本豪雨災害から学び、命を守る大切さを身に付ける。
- 3 土砂災害、浸水被害から命を守り、人的被害を防ぐ。

ープランの概要

- 1 豪雨災害の被災体験から得た教訓をもとに、小学生の防災力の向上を図り、命の大切さを学ぶ。
- 2 地域の危険箇所等を防災マップなどに反映し、金栄校区タイムラインを作成し地域で情報共有を図る。
- 3 松山地方気象台などの専門家を講師に招き、気象に関する情報、知識を習得するなど、防災への関心を持たせる。
- 4 西日本豪雨災害などの自然災害から命を守るため、地域特性を知り、命を守る防災活動へ展開させる。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

- 1 災害から命を守るために必要なことを学び、自分の命を守るための知識を習得することを期待できる。
- 2 児童が1年間かけて学んだことを、保護者などへ情報発信することにより、家庭内での防災力向上につながる。
- 3 金栄小学校タイムラインに基づき、地域の防災力向上を図ることができる。

ー成果として得たこと

- 1 気象予報官から、台風発生メカニズム、時間雨量の計測方法などの講話を聞いて、降水量と土砂災害、浸水被害がリンクしていることを知り、土砂災害などから身を守る大切さを知ることができた。
- 2 まちあるきで知り得た、地域特性などを用いて、各自治会単位の地域の地理的な実情に応じたタイムラインを作成した。
- 3 被災体験の教訓をもとに、自然災害から命を守る避難行動を学ぶことができた。
- 4 防災学習を通じて、地域、学校、消防が協働し、児童及び教員と住民の関わりと繋がりを深め、住民との絆づくり、日頃から顔の見える関係づくりができた。

ー全体の反省・感想・課題

- 1 消防職員がメインで防災教育を進めているため、災害発生した際には対応が困難となる可能性があった。
- 2 中学校に進学後も、防災教育を継続し、地域全体の防災力の向上を図る。
- 3 作成した金栄小学校災害タイムラインを来年度の災害発生時に活用し、避難状況の検証が必要である。

ー今後の継続予定

- 1 金栄小学校では、毎年5年生がテーマを変えながら防災教育を実施している。継続して防災学習に取り組み、地域全体の防災力向上を目的とする。
- 2 平成16年豪雨災害で甚大な被害を受けたことを風化させることなく、後世につなげていく。
- 3 金栄小学校災害タイムラインを活用し、災害発生時における身を守る行動等について検証を図り、避難率の向上を図る。



プラン名 水害メカニズムの要素になりきる-演劇&防災 WS-

プランの対象 児童生徒、大学生

所在地 埼玉県熊谷市

ープランの目的・ここがポイント！

大学生及び小学生が水害メカニズムをその構成要素（水、堤防など）になりきるロールプレイ手法をとり、演劇表現することで体感的に理解しつつ、観覧者にわかりやすく伝えることを目的とする。水害への備えとして、どのようにして水害（特に外水氾濫）が発生するのか、という水害の一連のプロセスを理解しておくことは重要である。そのプロセスを紙芝居も取り入れた演劇として実施することで、分かりやすく、面白く、かつ、体験的に演劇の演者側にも観覧者側にも伝えることを目指す。特徴として、水害プロセスに登場する、水や堤防や家屋などの構成要素そのものに人が演者としてなりきり、演劇することにある。

ープランの概要

- ・台本の製作&演劇準備。
- ・第一段階として、演劇を身近な人たち対象に試行も兼ねて実施し、フィードバックを受ける。
- ・本番として、地域の子どもに向けて演劇本番を実施する。感想などフィードバックを受ける。
- ・演劇内容の動画化、台本、道具の設計図などの電子的な保存を行い、webサイトなどで公開する。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

地域に向けて、水害の発生プロセスとその対策への理解を進めることができる。その際に、地域や学校などの一つのレクリエーションとしても実施できるような楽しさのある防災教育実践となることが期待できる。また演劇表現する、されることで、身体的感覚を伴った理解を促すことが期待できる。

ー成果として得たこと

- ・外水氾濫という一連のプロセスを演劇する予定であったが、装置もストーリーも長大なものになってしまった。簡素化してしまい、抑揚がなく観覧者に飽きられるのではないかとフィードバックをもらった。そのため、紙芝居も含めた演劇を取り入れることとした。まず紙芝居で外水氾濫のプロセス一連の流れをストーリーとして提示しつつも、特に重要で観覧者に注目してほしいポイントについては、紙芝居の間に演劇を挟むことで、観覧者の注意をひきつつ、学習ポイントとして残るように工夫をした。
- ・一方、水や堤防、家屋などに人がなりきり、演劇することは、それ自体が観覧者の興味を引くようで、演者が登場するたびに笑いが起こるなど、少なくとも注意をひくにはよいようであった。
- ・近隣の防災学習センターに相談をしたところ、センター内での実施を期待されるなど、試み自体に興味を持たれることが多かった。

ー全体の反省・感想・課題

- ・実施時期が大幅に遅れてしまった。台本や装置などの準備は比較的早く用意できたが、演者の募集に時間が大きくかかってしまった。今後同様の試みをする際には、その点を留意し、募集範囲を広げることや、あらかじめ演劇組織などつながり構築してから事業開始できるようにしたい。

ー今後の継続予定

- ・2020年2月初旬に、再度修正した版を実施予定である。
- ・2020年3月に、修正したものを近隣の防災学習センターで実施を目指している。
- ・2020年度においても、継続を考えている。

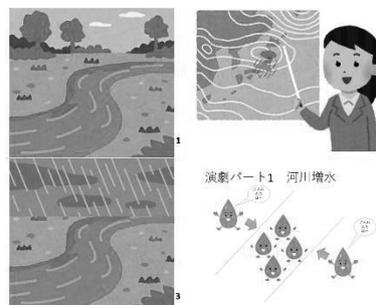


図 紙芝居&演劇の台本例



⑩新潟市立白南中学校

プラン名 オレンジはレスキューの魂 ～白南地域は私たちが支えます～

プランの対象 中学生、地域住民 **所在地** 新潟県新潟市

ープランの目的・ここがポイント！

1. 中学生が中学校区における地域防災の課題を多面的に洗い出し、その解決策を思考、検討する過程を通して地域を支える意識を育てる。
2. 実践的な活動を軸に、3コミュニティを融合させた、継続可能で実践・実用的な独自の防災訓練プログラムを策定する。
3. 段階的な実践活動を意図的に仕組むことで、「いざ！」という時にこそ、地域住民と生徒、教職員双方が互いに顔がわかり、連携し共に行動できる関係性を構築する。

ープランの概要

1. 南区の災害の危険性と前触れを知る。（講師：新潟大学災害・復興科学研究所教授）
2. 過去から学ぶ。（校外学習で中越地震、中越沖地震、新潟・福島豪雨を伝える資料館での学習）
3. 地域を支える力を知る。「中越地震 旧山古志村全村避難の真実」
（講師：元新潟県警察本部警備部機動隊長）
4. 地域住民も一緒に発災直後の避難所運営を考える。（HUGを活用したWS）
5. 地域住民も一緒に中・長期の避難所運営について考える。（さすけなぶる講師によるWS）
6. まとめとふりかえり（地域住民と一緒に避難所運営と今後の防災訓練について考え提言した。）

ー期待される効果・ここがおすすめ！

防災を自分事としてとらえ直し、新たな防災のあり方を考え地域に発信した。

ー成果として得たこと

1. 専門家の講演は、校区内の災害の危険性について、地域住民や家族から誤った情報が伝えられていた生徒の認識を一変させた。
2. 校外学習では、過去の被災地の資料館を訪問し、見学・体験・講話を通して、生々しい現実を知ることになった。
3. 旧山古志村全村避難の話では、災害への対応や地域の復興に生徒の中に、自分たちにも何かできることがあるのではないかという意識が芽生えた。
4. HUGを通して、避難所には多様な人が集まること、突発的なことが起きることに気づいた。
5. 避難所の中・長期化にともなって、避難所の課題が変化すること、対応について公平と公正の違いやさりげなく、すばやく、けむたがらずに、ないものねだりはやめて、ふるさとのように人に接し、避難所を運営する必要があることに生徒と地域住民が知ることができた。



ー全体の反省・感想・課題

1. 生徒と地域住民が共通の学びを行い、避難所運営や防災訓練の提言をまとめ、発信した。3地区それぞれの地域住民が来年度、防災訓練の見直しを明言した。
2. 理科、社会、保健体育、技術・家庭科、道徳で教科横断的なカリキュラムマネジメントを生徒・職員が意識した。

ー今後の継続予定

各地域の防災訓練の見直しが行われた。今後は、3地区合同の日程調整の段階に入る。

⑪岡崎市立常磐東小学校

プラン名

地域・学校・関係諸機関が連携した防災活動

プランの対象

小学6年生（6名）

所在地

愛知県岡崎市

ープランの目的・ここがポイント！

- ① 防災教育によって、子供自身が考えて、自らの身の安全を確保できるようにする。
- ② 地域全戸に防災アンケートの実施や防災電子マップの作成を通して、防災意識の高揚を図る。
- ③ 保護者・地域・大学・NPO法人・行政と連携し、児童が多くの人との関りを体験する。
- ④ 地域の方々と防災活動を推進することを通して、児童の「地域の一員」としての自覚を育てる。
- ⑤ 防災学習で児童の思考力・判断力・表現力を育て、達成感や自尊感情や自己存在感を培う。

ープランの概要

- ① 通学路の「まちあるき」をして危険箇所を探しパソコンで防災電子マップの作成と更新をする。
- ② 全世帯に防災アンケート調査をしてその結果を分析して、地域の人に知らせる。
- ③ 防災アンケートで非常食の販売希望の意見があり、防災パンや保存水の注文・販売を実施する。
- ④ 6年の児童が心肺蘇生法の講習会を体験学習して、幼い子供や高齢者の救命に役立てる。
- ⑤ 台風被害で避難の必要性を痛感し、「土砂災害マイタイムライン」の創作と実施をする。
- ⑥ 台風19号被災地の長野市信里小とTV防災交流授業を実施し、互いの実践の意見交流をする。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ① 関わりが少なく消極的傾向の児童が、学習を通して、自分で考え自主的な行動ができるようになる。
- ② 県から土砂災害特別警戒区域に117か所指定されており、人々に危機意識が広まり各自で対策する。
- ③ 学ぶことの本当の楽しさや課題を追究することの達成感を、多くの児童が、体感することができる。

ー成果として得たこと

- ① 「まちあるき」をして大学の方々と協力して、学区防災電子マップの更新をすることができた。
- ② 地域防災アンケートの他に、保護者も立ち上がり、保護者対象のアンケートを作り実施できた。
- ③ 6年が各町で非常食の必要性を発表し、大きな成果があり、児童がお礼のメッセージを作成。
- ④ 地域在住の元消防署長さんが講師で5年も一緒に6年生と心肺蘇生法を学習できた。
- ⑤ 児童が出前発表を行き、各町の人に「土砂災害マイタイムライン」を実践してもらった。
- ⑥ 信里小児童と台風の被害の甚大さと「マイタイムライン」等についてTV会議で協議した。

ー全体の反省・感想・課題

- ① 児童が自ら、土曜日や日曜日の地域の集会や集まりに出向いて「土砂災害マイタイムライン」の必要性や、非常食の備蓄の大切さを、自分の言葉で訴えることができた。普段の生活を考えると、それはすばらしい成長である。さらに、今後の活動を見守りたい。
- ② 2月中旬に、防災パンと保存水が届くので、児童の心のこもったメッセージを添え、配布をしている。
- ③ 防災電子マップを閲覧されている人が少ないので、さらに情宣活動をして地域の人々の安全に役立てたい。
- ④ アンケート結果から、遠くに避難するより自宅の方が安全だという意見が多く見られた。今後は想定以上の災害があり、「土砂災害マイタイムライン」を、一層活用して、早めの避難や準備を呼びかけたい。

ー今後の継続予定

- ① これまでの7年間の防災学習の実践と成果についてまとめて、地域全戸に配付を予定している。
- ② 「避難所運営マニュアル」や「常磐東学区HUG」の作成をして地域の人々の安全を図りたい。





⑫高知県立大方高等学校

プラン名

高校生が作る「地区防災計画」

プランの対象

高校生・地域住民

所在地

高知県黒潮町

ープランの目的・ここがポイント！

これまで継続して行ってきた津波避難訓練に加え、被災後の生活まで意識し、「生徒が主体的に考える防災教育」を目指した。2015年から町内61の地区において地区防災計画の策定を推進している高知県黒潮町において、生徒在校時の大方高校周辺地域を一つの「地区」と見立て、防災計画を充実させていくことを目的とした。

また、この活動を通して周辺機関や地域住民とのつながりを強化し、地域の防災力向上に貢献すること、学校外の方々との関わりを生徒の成長につなげることもこのプランの目的である。

ープランの概要

- ・周辺の小中学校との防災交流の推進。
- ・「オリジナルHUG」を活用した、防災活動の他機関への水平展開。
- ・「逃げトレ」アプリを用いた地域住民の避難路検証。
- ・「防災カルタ」作成と小学校への出前授業の実施。
- ・避難所運営マニュアル改善案の作成。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ・避難や避難所運営について考えることで、被災時のことを具体的にイメージすることができる。
- ・地域住民や周辺の小中学校とのつながりを強化することができる。
- ・地域の防災力向上に貢献することによる、高校生の自己有用感の向上が期待できる。

ー成果として得たこと

- ・高校生がオリジナルHUGを自分たちの手で作ることで、地域を知り、地域への愛着を深めることができた。
- ・町役場との協力体制が強化され、地域での防災活動がしやすい環境となった。
- ・地域住民の思いや不安などを直接聞くことにより、高校生の防災意識が向上し、地域防災への責任感などが強まった。
- ・地域の防災について考え、地域に貢献することにより、生徒の自信につなげることができた。
- ・黒潮町の課題でもある要配慮者への支援に関わることができた。

ー全体の反省・感想・課題

- ・昨年の反省を生かし、積極的に地域に出て、実践的な活動をすることができた。防災教育チャレンジプランの中で新たに始めた活動を、継続していくことが今後の課題である。在校生が卒業し、教員編成が変わっても、活動を継続させていく仕組みを確立する必要がある。



ー今後の継続予定

- ・年度をまたいでもアイデアを引き継ぎ、次年度の活動につなげていく予定。
- ・炊き出し訓練やオリジナルHUG実践など、恒例となりつつある活動を続けていく。
- ・地域住民の方との避難路検証を地道に継続していき、一つ一つの地区の不安を解消できるような活動を続ける。

⑬目黒星美学園中学高等学校

プラン名

地域に広げたい「わくわく防災減災」—長期的視点を持った防災教育を通じ、自ら考え生き残り・生き延びられる人材を育てる—

プランの対象

生徒・教職員・
地域住民

所在地

東京都世田谷区

—プランの目的・ここがポイント！

教育現場における実践を通じて、「教員が取り組みやすい・取り組みたくなる防災教育」「生徒が生き生き取り組む・成長する防災教育」の提案を行うことを目的とする。特に、日常の中に防災教育のチャンスを見出し、防災を楽しくあたり前にしていきたい。教員が教える防災教育からのマインドチェンジと脱却を図り、防災上の課題や生徒に教えたい防災の知識を、敢えて「生徒が解決すべき課題」として提示する「ミッション化」の手法により、生徒の主体的に行動する態度を引き出す。中高時代は、防災意識を高める以前の「防災に対する『あたり前』感覚」を育む大事な時期と捉え、生徒の防災に対してのイメージをネガティブからポジティブに、態度を受け身から主体的に変える。一連の学びと活動の副産物として、社会参画し、生徒のアイデアを実社会に役立てる「学びの社会還元」を目指している。

—プランの概要

- ・教科内における単元の「防災化」・教科横断型・行政や専門機関との連携等、特色のある防災教育の授業の開発と実践を行う。長期に渡る取り組みだけではなく、「小さな日常の工夫」も大切にする。
- ・生徒ならではのアイデアを具現化し、地域の防災意識向上に貢献することを目指す。
- ・被災地における防災学習を企画し、実施する。

—期待される効果・ここがおすすめ！

「隙あらば防災」を掲げ、「どうすれば学校の日常に防災を入れ込めるか？」を日々模索する中で生まれた数々のユニークな活動を共有することで、学校現場における防災教育のハードルを下げたい。

—成果として得たこと

- ・これまでの授業実践は、さらにブラッシュアップできた。新しい授業案も作成できた。
- ・特に今年度は、様々な教科の教員でアイデアを出し合い、教科横断型の授業実践を多く実現できた。
- ・首都直下地震中心の防災教育を展開していたが、今年度より台風・大雨と避難行動に着目した授業を行っていたところ、台風19号に直面し、生徒はある程度、学習を活かして行動を選択できた。
- ・防災教育においては、「日常の小さな工夫」の積み重ねが大事であることを再認識した。
- ・生徒のアイデアを、地域（行政・自治会・他校）と連携して、地域の防災イベントで具現化することができた。
- ・これまで蓄積してきた、実践を通じて得たこと・学んだことや成功の理由と失敗の原因、また疑問点などを分析し、整理したことで、教員として防災教育に取り組みやすくなった。



—全体の反省・感想・課題

これまでの実践を踏まえて、さらに各プランを発展させられた一年になったと思う。生徒からの活動提案が多くあったことが、今年度、何より嬉しかったことである。学外との連携を積極的に図っているが、その際に、防災「教育」と本校の方針について十分説明しなかったことによる失敗も経験し、防災「教育」のコンセンサスの重要性を再認識した。

—今後の継続予定

「時間数がない・防災の知識がない」という現場の悩みに応えることを目指して、実践を重ねてきた。ただ、これらの課題をクリアするだけでは、現場に防災教育を浸透させるには不十分だと考えている。防災教育に楽しく取り組むことで、「防災教育の魅力」を高めることを目指して、これからも実践を続けていきたい。今年度も3月まで、複数のプラン実施を控えているので、引き続きわくわく取り組む。



⑭愛媛県立宇和島東高等学校

プラン名

「学ぶ」から「教える」「育てる」へ 小さな“防災士”がつなく地域の防災

プランの対象

小中高生

所在地

愛媛県宇和島市

ープランの目的・ここがポイント！

本校は、本チャレンジで、『高校生が学ぶだけでなく、小中学生にその学びを広げる』ことに挑戦した。平成30年7月の西日本豪雨の経験を踏まえて、高校生に地域防災を担う人材であるという自覚を持たせるだけでなく、その輪を広げ、地域全体の防災力向上に努める。

ープランの概要

- (1) 『高校生自らの学び』として近隣の8高校による合同学習会を実施。また、本校生徒を中心に防災に関する課題研究にも取り組んだ。
- (2) 『学びの発信』として、学会・フォーラム等への参加、小中学生防災キャンプへの参加の2つを実施した。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

それぞれの経験を踏まえた、高校生同士の意見交換ができる。／豪雨災害時に避難所運営を行った方から実際の避難所運営について聞くことができる。／避難所生活あるいは運営を行ううえで地域とのつながりやリーダーシップをとること、互いへの思いやりが大切だということがわかる。／日頃の備えの大切さを知ることができる。／愛媛県宇和島市の取組を国内外に広く発信することで、国内外への防災教育啓発とすることができる。

ー成果として得たこと

実施した学習会は、8高校合同の学習会であったこと、実際に経験した豪雨災害という題材を体系化できたことの2点において、非常に意義深いものになった。

得られた最も大きな成果は学校と地域との繋がりである。近隣の小中学校、PTAの方々、市役所や行政の方々、NPO団体など多くの方の協力を得て活動ができた。高校生の活動を地域の方々に見ていただけたこと、地域の方々から学ぶことができたこと、本校の取り組みを高く評価していただいたことで、地域との繋がりがより強いものとなった。今後の本校における教育活動により影響をもたらすものと考えている。

ー全体の反省・感想・課題

他の高校や関係機関との日程調整が大変難しく、全ての行事に全ての学校が参加できたわけではない点が残念であるが、多くの学びの場を、生徒に経験させることができた。このプランを通して得られた最も大きなものは地域や他校、団体、関係者との繋がりである。災害時に限らず、様々な場面で互いに協力しあえるのではないかと思う。関わっていただいた大人からの声掛けや指導が大変ありがたく、高校生に地域を支える人材としての自覚を持たせ、その態度を醸成させることに大きく貢献できたのではないかと考える。



ー今後の継続予定

実施した全体の活動は、2020年度も実施予定である。新しいテーマをもとに高校生自ら学び、その学びを小中学生に伝えるという取り組みを継続し、宇和島市の防災力向上に貢献していく予定である。

⑮UR 都市機構(尾山台団地自治会)

プラン名

団地の防災力をダンチガイに!!

～安心・安全 団地でサバイバル（在宅避難）～

プランの対象

団地住民

所在地

埼玉県上尾市

ープランの目的・ここがポイント！

発災時には避難所が不足すること、また高齢化により、発災時には、団地内の緊急避難場所にも避難できない要配慮者が多数存在することを認識。「在宅避難」を可能にすることが「減災」にもつながると考え、防災意識や「自助」に関する住民アンケートを実施。その結果に基づき、ワークショップで楽しみながら議論することで「自助」「共助」「近助」カアップと共に、多世代間の「コミュニティ強化」を目指す。さらに、UR賃貸団地初の地区防災計画策定に取り組んでいる。

ープランの概要

防災をテーマとした交流の場「尾山台団地みんなの防災カフェ」を継続開催し、「震災でも団地は倒れない」「避難所には全員が避難できない」を前提に、住民自らで課題の洗い出しと対策の立案を進める。自主的かつ継続的な活動に加え、上尾市防災士協議会による地震対策講座や防災訓練での上尾看護専門学校による救急講習等の協力を受け、防災知識の向上と団地のコミュニティ活性化を図る。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

取り組みの一つとして、市と協働で指定避難所（小学校）への避難訓練を実施し、避難スペースや段ボールベッドを作成。参加者の多くは、楽しく体験しながらも体育館での避難生活より住み慣れた自室での避難に安心感やメリットを実感。一連の取り組みの総まとめとして、発災時は、原則「在宅避難」を推奨する地区防災計画策定及び「防災の手引き」改訂。

ー成果として得たこと

「防災カフェ」の中では、ある方のお話が他の方の気づきとなる場面もあり、楽しく会話をしながら自助力の向上にも繋がった。また、防災カフェ後には参加者から楽しかったと仰っていただくなど、これらの活動が高齢者への外出機会の創出や新たな交流の場にもなったのではないかと感じている。また、上尾市防災士協議会や看護学校、近隣の大学等、地域関係者との連携も深めることができた。

最大の成果は、これらの活動の積み上げにより、UR賃貸住宅初となる「尾山台団地地区防災計画」を完成させたこと。地区防災計画策定には、住民同士の自助や共助が大きな要素となるため、住民の皆さんの理解と協力により、団地のコミュニティ活性化が図られた成果と認識している。

ー全体の反省・感想・課題

防災カフェなどの場を通して集めた住民の意見を反映し、団地の実態に合わせた計画を完成した。今回の活動をきっかけとして、今後は長年お住まいの高齢者と比較的短期間で入れ替わることの多い若年層の双方をコミュニティに取り組み、防災を含めた活動をさらに活性化させていきたい。

ー今後の継続予定

「防災カフェ」のテーマ“部屋をきれいにする”をきっかけに、フリーマーケットやネットを活用し、高齢者・若年層の双方に通ずる“不要品を利活用する”仕組みを検討中。

モノだけでなく文化も繋ぐ世代を超えたコミュニティ活性化の場を創るとともに、不要品を利活用することで自室内をきれいにすることで、家具固定等、命を守る防災対策の啓発にも努めたい。





防災教育チャレンジプランに期待する

防災教育チャレンジプランが2004年に今の形になって17回目のチャレンジになります。これまで300近い優良な活動を支援させていただきました。そして、2015年にはそれまでの成果を踏まえ、防災教育をしたいと思う人が、どう準備し、どう実行し、どう継続するかノウハウをまとめた「地域における防災教育の実践に関する手引き」を公開しました。同時に防災教育に関わるさまざまな団体と共同して防災教育普及協会も設立できました。最初の10年は防災教育を普及させる10年と位置づけられ、2014年からの10年は東日本大震災からの復興の教訓も加味しながら防災教育を体系化する10年にしたいと思って活動しています。

防災教育チャレンジプランの成果は、昨年頻発した風水害や、21世紀前半に発生が確実視されている南海トラフ地震や首都直下地震のような巨大な地震災害を乗り越える上での大きな資産です。こうした災害に立ち向かう主役は2000年以降に生まれた若い人たちです。若い人たちが、自分自身を守り、お互いに助け合っていける力を育ておくことが、この国の将来にとって不可欠です。これは学校だけの仕事ではなく、学校・地域・家庭が協力してさまざまな試みを重ねていくことが大切です。

今年度のチャレンジプランには、34団体の応募をいただきました。どれも素晴らしい内容でしたが、予算の制約があり、今回はその中から15団体のプランを選ばせていただきました。防災教育の内容をできるだけ多様にできるプラン、いろいろな場所でできるだけ幅広い層が関われるプランへと成長してほしい「たね」を重点的に選ばせていただきました。選ばれた各団体はいろいろな面で「チャレンジ」し、今後の防災教育を推進する上での共通の資産を増やすために努力をしてください。

今回選ばれた皆さんのプランが今日をスタートとして、1年間の実践を経て大きな実を結び、来年2月の活動報告会に成長した姿で戻ってきてくださることを期待してやみません。

防災教育チャレンジプラン実行委員長
国立研究開発法人 防災科学技術研究所 理事長

林 春 男

我が国は、その自然的条件から、各種の災害を受けやすく、東日本大震災や熊本地震、2018年の西日本豪雨や台風21号、2019年の台風15号や台風19号などの大きな災害が相次いでいます。南海トラフ地震や首都直下地震など巨大災害は切迫しており、また、気候変動の影響も受け、水災害は頻発化、激甚化しています。

政府では、こうした災害について調査・分析を行い、課題・教訓などを活かした防災対策を進めていますが、防災・減災に向けては、「公助」はもとより、災害に対し、国民一人ひとりが「自らの命は自らが守る」、地域の皆様が「地域みんなが助かるよう支え合う」といった「自助・共助」の取組みを一層強くしていかなければなりません。

このためには、学校で、地域で、子どもの頃からの防災教育や避難訓練を通じて、地域の災害リスクを理解し、自らそして地域としての各種災害への対応方法を学び、いざという時に実際に動けるよう適切に備えることがとても重要です。

皆様からのご支援により、「防災教育チャレンジプラン」の取組は今年で17年目を迎えます。今回選ばれた13団体の皆様には、精力的にご活動いただき、地域の防災活動の主体となりご活躍いただくとともに、この取組のさらなる発展と我が国の防災力の向上に貢献していただくことをご期待申し上げます。

防災教育チャレンジプラン実行委員
内閣府政策統括官(防災担当)付 参事官(普及啓発・連携担当)

中 尾 晃 史

2020 年度実践団体の紹介

【1】 京都府立東稜高等学校キャリアコースライフマネジメントクラス

プラン名 実践マネジメント（京都東稜のぼうさい普及活動）

応募部門 高等学校の部

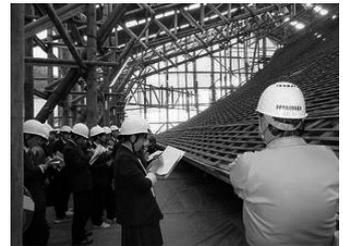
所在地 京都府伏見区



一目的・特徴等

以下の3点の活動を中心に京都初の防災教育カリキュラムの実践を行います。

- ①高校生が日頃の学習活動を通じて自ら企画したワークショップを地域の小・中学校で実践！
- ②防災を切り口にした家族間のコミュニケーション力を深め、家族の共働き、自助力を高めるワークショップを地区の防災訓練で実践！
- ③京都という地域性を活かした文化財を災害から守る取り組みを紹介し、防災活動だけでなく、歴史への興味・関心を深める活動を実践！



一団体紹介

本校は、世界文化遺産の醍醐寺、小野小町ゆかりの随心院、そして四季折々の景観や緑豊かな醍醐山・高塚山など、文化、自然豊かな環境に位置する学校です。災害発生時の避難所に指定されている本校で、京都初の環境・公共・防災学習について学習するキャリアコースライフマネジメントクラスが2018年度にスタートしました。現在、地域の小・中学校や自主防災会などと連携した授業を行い、発表の機会をいただいております。この取り組みを生徒達の活動を通して発展させ、地域に限らず、多くの皆様に知っていただく機会になればと考えております。



【2】 岐阜県立大垣特別支援学校

プラン名 守ろう自分の命、家族の命

応募部門 中学校の部

所在地 岐阜県大垣市



一目的・特徴等

1. 生徒が日常生活や災害時の危険な状況を理解し、自ら安全行動をしたり、大人の指示で行動できたりする。
2. 家族と共に活動に取り組み、家庭の防災意識向上と対策を啓発する。
3. 防災学習用アプリの製作など、交流校との活動を通し、防災意識の共有と地域への広がりを図る。

一団体紹介

当校は、昭和49年に知的障がいのある児童生徒を対象とした養護学校として開校しました。平成29年度からは、肢体不自由と病弱障がいにも対応した総合化の特別支援学校となりました。

当校がある岐阜県大垣市は、南海トラフ巨大地震が発生した場合、家屋の倒壊や液状化等の甚大な被害が想定されています。そのような災害が発生した場合でも、児童生徒が自分の命を守り切ることができるよう、障がい特性に応じた防災教育の推進や、家庭、地域との連携に取り組んでいるところです。





【3】北海道標津高等学校

プラン名 標津高校防災活動協働プロジェクト

応募部門 高等学校～
大学・一般の部

所在地 北海道標津町



一目的・特徴等

高校生が主体となり、町役場、行政及び地域住民と連携し、「高校生が町を守る」ことを意識させ、主体的に行動できる地域防災リーダー育成に取り組む。2019年度に作成した「オリジナルHUG」を地域に普及させるために、地域を巻き込んだHUGやREAL HUG（避難所開設シミュレーション及び避難所体験）を行い、有事の際のスムーズな避難所開設を目指す。また、高校生が主体となり、防災活動を小中学生に普及させることにより、町内で一貫した防災教育の浸透を図り、非常時に適切な行動をとることができる児童生徒の育成に貢献し、地元愛を持った児童生徒の育成を図ることを目的とする。

一団体紹介

本校は、北海道標津町内にある全校生徒数146名の小規模校で、洪水、高潮、雪害、津波被害の想定される地域に位置しています。本校生徒会では、HUGを取り入れた防災の取組を実施、さらに町主催の防災訓練に協力をしてきました。近年は、被災地へのボランティア参加や現地視察研修を実施しました。また、本校の避難所としての機能を確保するために避難所設営訓練を実施し、防災意識の向上に努めてきました。生徒会交流も実施しており、釧路管内の高等学校や隣接する羅臼高校との交流会を重ね、活発な生徒会活動を実践しています。



【4】愛知県立豊橋特別支援学校

プラン名 とよまつ学(まな)防災(ぼうさい) ～地域・家庭・学校の防災の和～

応募部門 小学校～高等学校の部

所在地 愛知県豊橋市



一目的・特徴等

1. 児童、生徒、職員一人一人が防災について学び、自然災害等の危険に際して自らの命を守り抜く力、考え行動できる力を養う。
2. 「共に生きる」「社会に役立つ」意識を高め、地域と連携した持続可能な防災教育を実施する。

地域と連携した防災活動や実践的な訓練に取り組む。寄宿舎での避難所体験をして課題や問題点を明確にする。車椅子児童生徒の的確な避難の仕方や校内環境整備をする。

一団体紹介

本校は、肢体不自由を対象とする小学部、中学部、高等部からなる特別支援学校である。近年障害の重度重複化、多様化が進み、日常生活での活動範囲が限られる児童生徒が増えている。激甚災害に備えて、備蓄食を児童生徒の実態に合わせて7日分備えている。防災訓練を継続的に取り組むことで、児童生徒たちが主体的に自分の身を守る行動ができるようになってきている。平成31年1月には、ユネスコスクール加盟申請を行い、ESD活動の一環に防災教育を位置づけ学校全体で防災体制を整えている。



【5】常総市防災士連絡協議会

プラン名 地域と学生が作る地区防災計画—避難所開設運用編—

応募部門 中学校の部

所在地 茨城県常総市



一目的・特徴等

地区防災計画を作成するにあたって、避難所運営の具体化を検討する際、以下3点をプランの目的として活動します。

1. 地区防災計画作成において、住民と生徒が連携した避難所開設運営モデルの検討を行います。
2. 実践的な避難所開設運営訓練を通して、防災教育を実施します。
3. 地区住民と学校に対する避難所開設運営の理解を促進し、周知徹底します。

一団体紹介

常総市防災士連絡協議会は、地域の防災力向上と災害に備える地域づくりをスローガンとして、2018年9月に発足いたしました。私たちの理念は、地域に密着し、自主的かつ能動的に行動出来る「市民に寄りそった防災士」であることです。

なかでも、自主防災活動の中核として組織結成の支援や訓練のサポートを行っております。

また、地域と市役所の架け橋となり、地区防災計画作成を支援したり、マイ・タイムライン作成講座へ講師を派遣するなど会員個々のスキルアップや情報交換の機会を設け、地域全体の防災力の底上げに力を注いでいます。



【6】特定非営利活動法人 i-care kids 京都

プラン名 「医療的ケア児と家族のための防災チャレンジ」

応募部門 保育園・幼稚園の部、
大学・一般の部

所在地 京都府京都市



一目的・特徴等

近年、新生児医療の発達とともに人工呼吸器や経管栄養などの医療デバイスを使いながら子どもたちが急増し、全国に19,000人ほどいると言われていています。災害時にこのような医療的ケア児をいかに守れるか、日ごろからどのような準備をしておいたら良いかなどを、子どもたちの家族、医療、福祉、保育などの関係者が学び、防災につなげていくとともに、子どもたちの命を守るための横のつながりを構築したいと考えています。



一団体紹介

私たちの団体は、医療的ケア児の家族を中心に、医療、福祉、療育、保育などの専門家とのつながりなど、様々なつながりをもとに、医療的ケア児と家族を支援する特定非営利活動法人として、2019年1月に設立されました。2020年4月に医療的ケア児を積極的に受け入れる小規模保育園「キコレ」を開園します。「キコレ」開園後は、保育事業を柱に、様々な家族支援事業を展開していく予定です。

災害が起こるたびに、「いざという時の電源確保はどうしたらいい?」「どこに避難したらいいのだろうか?」「避難する時に持っていく医療物品や薬はどうしたらいいだろうか?」など様々な疑問がわいてきます。子どもたちの命を守るために、積極的に防災に取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



【7】愛知県刈谷市井ヶ谷町内会体育部

プラン名 地域の教員養成大学の学生と連携した町内防災運動会

応募部門 大学・一般の部

所在地 愛知県刈谷市



一目的・特徴等

本プランの活動のねらいは、地域の指定避難所でもある教員養成大学の学生が、防災運動会へ参加をすることをとおして災害に遭遇した際に必要となる防災に関する知識を身につけるとともに、地域防災の担い手として活躍できるための支援を行うことである。従前の防災運動会の競技を見直し新設の競技を学生と協働で開発・実践する活動を行うとともに、学生参加の年間プログラムに展開することで、地域住民・学生双方の防災意識の向上を図ることを目指す。



一団体紹介

井ヶ谷町は愛知県刈谷市北部に位置しており、町内に本計画の交流相手としての教員養成大学を有する。人口5,880人（令和1年11月現在）とともに、昼間人口として学生・教職員の最大数約5,000人をもつ。刈谷市内には23の自治会があるが、井ヶ谷町内会はその中でも活動が盛んな地域のひとつであり、体育部は町内会の有志により組織され、現在約25名が活動している。運動会では従来より防災関連の競技を取り入れており、本年度は全種目の半数を超える8種目を実施した。次回令和2年度大会は第40回記念大会として10月に実施する予定である。



【8】ガールスカウト東京都第172団

プラン名 ガールスカウトのチカラで防災女子を増やそう！

応募部門 高等学校の部

所在地 東京都練馬区



一目的・特徴等

1. スカウト歴10年の女子高校生が避難所体験のリーダーをすることで、被災時に多様性に配慮した防災責任者の育成に貢献する。
2. 小学生が「楽しい」避難所訓練をすることで、災害時の不安を軽減し、被害の拡大を防ぐ。
3. 防災ポーチを持つ人を増やすことで災害時の被害の軽減と通常時の防災意識を高める。

一団体紹介

当団は練馬で40年の歴史あるガールスカウトです。宗教や事業者などの母体を持たない「地域団」です。小学1年生～高校生までのスカウト18人とその指導者、保護者合わせて約40人で活動をしています。月二回、野外訓練とそのスキルを活かして、商店街や社会福祉協議会、環境団体など地域と連携してボランティアに取り組んでいます。特にSDGsに基づいて、環境、福祉、防災のボランティアに力を入れています。今回の防災ポーチの取組み、避難所訓練の取組は、昨年から取り組んでいます。



【9】佐野日本大学短期大学防災チーム

プラン名 多分野を生かした防災教育の取り組み

応募部門 大学・一般の部

所在地 栃木県佐野市



一目的・特徴等

1. 本学における避難所開設手順をまとめ、地域貢献の一助とする避難所開設手順をまとめ、手引書を作成する（学生）。防災教育、避難訓練等の教材を開発する（教員）。学生主体で取り組み、防災意識向上及び社会人として就職した先での防災意識定着に役立てる。
2. 本学の専門性を活かした災害時の支援を身に着け、防災知識を得た専門職、就職先へのアピールポイントとする。就職先から広く防災意識向上に役立てる。



一団体紹介

本学は、平成2年に開学した短期大学です。開学以降、常に時代のニーズに対応した学問を備え、社会から求められる人材教育を行ってきました。平成22年総合キャリア教育学科開設以降は、学生が将来希望する職業に就くために必要な知識・技能を身につけることができる教育を推し進め、地域社会で活躍する人材を輩出してきました。

今回のチャレンジを通し、災害が日常となりつつある現代社会で貢献できる優秀な人材育成を行い、地域との連携をさらに深めるとともに、より実践的なカリキュラムへと「学び」を進化させたいと考えます。



【10】愛媛県立宇和島東高等学校

プラン名 「学ぶ」から「教える」「育てる」へ
～小さな“防災士”がつなぐ地域の防災～

応募部門 高等学校の部

所在地 愛媛県宇和島市



一目的・特徴等

本校の立地する宇和島市文京地区は5つの学校と1つの幼稚園が近接しており、合同避難訓練や学習会が行われています。2019年度、本校は、その学びの場を発展させて、『高校生が学ぶだけでなく、小中学生にその学びを広げる』ことに挑戦し、地域全体の防災力向上に努めました。平成30年7月の西日本豪雨で経験した避難所生活・避難所運営をテーマとし、その体験を体系化した高校生の学びを小中学生に伝えました。本年度もその学びを継続していきます。

一団体紹介

愛媛県立宇和島東高等学校は、愛媛県南予地方に立地し、創立124年目を迎えた伝統校です。全日制普通科・理数科・商業科、定時制が設置され、アクティブラーニングや課題研究などによる、問題解決型の学習が多く取り入れられています。スーパーサイエンスハイスクールSSH事業の活動も盛んです。また、質の高い文武両道をモットーに部活動に励み、文化部・運動部とも多くの部が全国大会で活躍しています。

委員会活動やSSH課題研究などで防災について学んできました。自分たちの学びの場を、近隣の小中学生に広げ、地域の防災力向上につなげたいと思います。





【11】新居浜市立金栄小学校

プラン名

金栄小学校災害タイムライン
～Myタイムラインの実行と避難率向上を目指せ～

応募部門

小学校高学年の部

所在地

愛媛県新居浜市



一目的・特徴等

【目的】

- 1 金栄小学校災害タイムラインの実行と避難率の検証を行う。
- 2 学校防災を継続し、自分の命を守り、自助、共助で生き抜くことを身に着ける。
- 3 金栄校区で発生した台風災害による被災体験を次世代に継承させ、平成16年災害を絶対に風化させない。

【特徴】

- 1 毎年体系的な防災教育を実施することにより、小学生の防災力の向上につなげ、金栄小学校災害タイムラインを活用して地域の避難率の向上を図り、人的被害の軽減につなげる。

一団体紹介

地域住民と過去の自然災害による被災体験から得た教訓を生かし、保護者、地域住民とともに防災力の向上を目的としています。今年度作成した、金栄小学校災害タイムラインを活用し、自然災害時の避難率向上を目標として、防災学習に取り組み、一人の被害を出さないためにも、金栄校区一丸となって避難率の向上を図ります。



【12】呉工業高等専門学校

プラン名

3Dマップによる小中学校向け防災教育

応募部門

小学校高学年～高等学校の部、大学・一般の部

所在地

広島県呉市



一目的・特徴等

呉高専の学生が、小中学校と連携して児童生徒と一緒にジグソーパズルを組み立てる感覚で、地形の特徴を認識しながら3D地形模型を作り、防災教育に活用します。2017年度防災教育チャレンジプランで実践した内容をバージョンアップし、材料の切断はすべてレーザー加工機を使って、小学生でも速く安全に簡単に作れ、さらに解体収納もできる3Dマップを提供。2019年度から5年間で呉市立小中学校全62校での防災授業実施を目標に活動しています。

一団体紹介

呉高専では、2015年から学年学科を超えた学生チームでプロジェクトを遂行する「インキュベーションワーク」という授業を行っており、現在80の学生主体のプロジェクトが動いています。3Dマップ製作チームでは、GISとレーザー加工機による3D地形モデル製作とそれを使った防災活動を行っています。

<https://www.facebook.com/3DMapKureKosen/>

2019年度「初等中等教育における地理情報システム（GIS）を活用した授業に係る優秀事列表彰」
地理情報システム学会賞 受賞



防災教育チャレンジプラン募集の御案内

1. 募集の概要

防災教育チャレンジプランでは、全国で取り組まれつつある防災教育の場の拡大や質の向上に役立つ共通の資産をつくることを目的に、新しいチャレンジをサポートいたします。

そのプランの準備・実践に当たって発生する経費を支援し、実現に向けて防災教育チャレンジプランアドバイザーが伺うなどして相談などの支援を行います。

応募の中から選ばれたプランは、活動計画について前年度の活動報告会（最終報告会）で発表、さらに1年間実践した結果を、交流フォーラム（中間報告会）と活動報告会（最終報告会）で成果を発表していただきます。

活動報告会（最終報告会）においては、優秀な実践活動に対して防災教育大賞、防災教育優秀賞、防災教育特別賞を授与いたします。

また、皆さんのチャレンジプランの成果はホームページなどで広く公開いたします。

サポート内容	<ul style="list-style-type: none">■プランの実践にかかる経費の提供／上限 30 万円(査定による) ※活動・予算計画書の提出及び団体名義の口座が必要となります。■交流フォーラム(中間報告会)・活動報告会(最終報告会)発表者への交通・宿泊費の支給。(1名分×3回分)■プランの実現に向けて、実行委員会が認定する防災教育チャレンジプランアドバイザーが助言や現地指導等の支援を行います。■防災活動の手法・事例の収集と活動情報の発信ができる各種 web ツールを提供します。
表彰	<ul style="list-style-type: none">■活動プロセス及び成果に対して審査を行い、優秀な実践活動に対して、防災教育大賞・防災教育優秀賞・防災教育特別賞を決定し、表彰状と盾を授与いたします。■防災教育チャレンジプラン「サポーター」として認定いたします。

2. 応募資格

- 防災教育を一層充実させたいと考えている教育・社会福祉施設(保育施設・幼稚園・学校等)、教育委員会、NPO、民間企業、個人、地域団体(民間事業所、各種団体、行政機関)
- 採用された場合は、都内にて開催予定の実践団体決定会、中間報告会、最終報告会の計3回の会合に出席できること。

3. 応募部門（プランの対象別）

- A. 保育園・幼稚園等の部 B. 小学校低学年の部 C. 小学校高学年の部
D. 中学校の部 E. 高等学校の部 F. 大学・一般の部

4. 募集期間

毎年9月頃～12月頃に募集。詳細は、ホームページ上でお知らせいたします。



防災教育チャレンジプラン

■ 防災教育チャレンジプラン実行委員会事務局
E-mail : cpinfo2865@bosai-study.net

■ 防災教育チャレンジプランホームページ
<http://www.bosai-study.net/>

※E-mail アドレスは、予告なく変更することがあります。
最新情報は、ホームページでご確認ください。